服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

ドーバー越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織

FROM FRANCE
中野香織⑦⓪

魔界の小豆

北に大地の端っこにしがみついて生きる人あれば、東に小豆一粒を守り抜いて生きる妖怪あり。

遅まきながら見てきたんですよ、「妖怪大戦争」。妖怪キショイし、と思って当初はパスするつもりでいたんですが、本誌8月下旬号の三池崇史監督のあるひとことが私を魔界へと導いていきましたのです。

「今、(「妖怪大戦争」を)作らなきゃいけない理由は何もない」

……なんといさぎよく涼しいおことば!

恥ずかしながら三池ワールド未体験だったんですが、このひとことに夏バテもふっとび、さっそく入門編として、敦子さんおすすめの「牛頭(ごづ)」のDVD鑑賞。

冒頭のヤクザ犬から牛頭男、壁のセリフを棒読みする金髪妻などなど、初期のデイヴィッド・リンチのシュールぶりを軽くしのぐ定義不能な才能に判断停止状態。その勢いで「妖怪大戦争」を見たものですから多少買いかぶりすぎかもしれませんが、いえそれでも、これはもう、世界市場で堂々勝負できる大傑作ではありませんか。おっと妖怪さんたちは勝負は腹が減るからお嫌い、世界を踊らせることのできるお祭り映画!

「妖怪大戦争」丸の内ピカデリー2ほか全国松竹・東急系にて上映中

オブジェ制作=井上陽子

とりわけしびれるのが小豆の扱いで、「牛頭」で意味ありげなフリして無意味にういていたお赤飯のなかの小豆、その残像がなんとこの大作にみごとに引き継がれ(牛頭妖怪もちらと登場するし)、映画のはじめのほうに出てくる「小豆は、体(みがら)にええだ by じいちゃん」のちんけな標語がラストに輝かしくアナーキーに生きてしまうという、超絶技巧。「すごいテクニシャンで全身がゾクゾクしたわ」。

ってこれは実はジュード・ロウとの情事をタブロイドに暴露したナニー(子守)のセリフなんだけど(といきなり下世話なゴシップにとびます)。この騒動で『タイムズ』紙は「ナニー・ブレイク」ということばを造ったんです。美しくゴージャスなパートナーをもちながら、本命とは比べようもない凡庸な女に慰めを求めてしまうという男のサガを、今後こう呼ぶらしい。

不思議なのは、この騒動でいちばん株を上げたのがロウの前夫人のサディ・フロストってこと。傷心のシエナ・ミラーに対し心からの同情を示したことで、「大人の女」として讃えられているばかりじゃない。『タイムズ』紙によれば、「刺客」としてこのナニーをロウのもとへ送り込んだのが実はフロストだったとの説もあるのだとか。で、そんなフロストを同紙は「天才」とほめてるのです。ああ妖怪ワールドよりおどろおどろしい大魔界、英国セレブ界……。